公開講演会

# 「現代科学とキリスト教 －科学は価値中立的でありうるか－」（要旨）

講師　隅谷三喜男氏（東京大学名誉教授・日本学士院会員）

加山　久夫

現代科学が合理性と客観性を二つの柱として今日に至る発展を遂げてきたことは確かである。具体的には、近代科学はドイツを中心とする西欧、特にプロテスタント文化圏において発展を見たが、それは聖書の創造物語に基づく創造者／被造物信仰に大きく起因しているといえよう。それがすべてのものを神の被造物とすることにより非呪術化、合理的対象化したからである。しかし、皮肉なことに、そのようにして生まれた地動説や進化論は教会の指導者たちとのあいだに摩擦を生じるところとなった。

明治期にキリスト教が日本に入って徐々に広がりはじめた明治３０年代、特に知識人にとって大きい問題はキリスト教と進化論の問題であった。キリスト教は近代科学思想と矛盾するというキリスト教批判のために進化論を引き合いに出す向きもあった。

しかし、科学はつねにある仮説のうえに立って理論を組み立てる。時代と共にその仮説では説明出来ない事柄が現われると、新たな理論を必要とする。科学、ことに社会科学は仮説性をまぬがれない。歴史家は、歴史を書く際、何が重要かについて判断し、歴史像や価値と関わっている。専門分野である労働経済において、労働も一つの商品とされてきたが、それはそれとして正しいとしても、労働は労働者と分離しえないものである点で他の商品とは異なる。今日、学問は客観的な価値大系だけで構築できるのか、再検討がせまられているのではないか。

学生時代に、マルティン・ブーバーの著書『我と汝』に出会って深く示唆を受けた。現代社会はしかし、洪水のように情報を提供し、「我とそれ」のなかに埋没しているのではないか。現代科学も同様ではないか。教育の場で、人格的な「我と汝」が強く要請されている。

われわれが〈生〉を考えるとき、ヨコ軸とタテ軸が必要である。対象を客観化するヨコ軸の世界（学問、科学）と共に、価値を問い真理を問うタテ軸の世界がもとめられる。自然科学とキリスト教の衝突というとき、それはヨコ軸の中で生じたのである。しかし、キリスト教は本質的にタテ軸の世界を提供している。「現代科学とキリスト教」という場合、タテ軸とヨ

コ軸の関係をさし示すのである。

以上が、隅谷三喜男氏の講演の要旨（文責筆者）ですが、学内外の多数の聴衆に深い感銘と刺激を与えるものでした。数名の方々から、主として氏のヨコ軸とタテ軸の関係づけについて質問があり、懇切にお答えいただけたことは幸いでした。この講演のテーマは、本研究所の共同研究プロジェクト「キリスト教主義教育」での論議から新たに提起され問われてきた問題です。近い将来、「学問・人間・キリスト教」というより包括的な主題のもとに、本講演の内容も活字にして、より広く読んでいただきたくねがっています。

（かやま　ひさお
所長、一般教育部教授）